
俺のキモチをたべてくれ！

秋野夜長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のキモチをたべてくれ！

【Nコード】

N8878F

【作者名】

秋野夜長

【あらすじ】

坂上康介がアルバイトにやってきたのは、小綺麗な旅館。そこにいたのは金髪碧眼の着物少女だった。大和撫子女将や親バカ英国紳士の支配人、十代最後のはちゃめちゃ女将見習いがいれば堅物料理人とその弟子もいて、そんな様々な人達と過ごす一週間。そして彼女を苦しめるとある秘密を知った時、康介がとる行動とは？基本コメディークックで、ほんのりファンタジーを含めた小説です。

第01話 旅館とドロップキック（前書き）

どうも、秋野夜長と申します。投稿はこれが初めてです。とある事情から携帯で執筆しているために、携帯でもさくりと読めるようにと展開が早め（早すぎ？）に感じるかと思います。よく言えば安心して読みやすく、悪く言えばありきたりな物語かと思いますが、なにか思ったこと、気づいたことがあれば気軽に感想欄に書いていただきたいと思います。

第01話 旅館とドロップキック

「よく来たな。褒めて遣わすぞ」

「仕事を手伝いにやって来た孫に向かって、相変わらずの口の悪さだな。婆ちゃん」

春が名残惜しく背中を向けだし、夏が季節の扉をノックし始める。そんな四月の終わり。今日はいわゆるゴールデン・ウィークの初日だ。

「また無駄にでかくなつてまあ。少しは遠慮つてものをしろ」

「孫の成長を喜ばない祖母が、この世に存在するとは……」

紺色の着物を着た婆ちゃんは、さらに顔をしわくちゃんにして、なんと意地悪い笑顔をつくつた。

よく晴れた空は大海原みたいにとこまでも広く澄みきっていた。

暖かいと言うよりは暑いくらいの陽気のせいで、俺の片手はジャケットで塞がれている。

「……ここがその旅館？」

「お前は来るの、初めてだったか？」

見上げた先には、なかなか立派な立ち住まいの純和風旅館がある。修学旅行で泊まったような大きなものじゃないけど、そこそこの宿泊客がいそうだ。

「というか、俺はここで何すりゃいいの？ 接客？」

「おもてなしの『お』の字も知らないお前に、お客さんをまかせるわけないだろうが。身の程を知れ、ゆとり世代が」

「……ほんとにまあ、口の悪い婆さんだな。自分はWW2世代だろうが」

こんな人に育てられた反動だからだろうな。父さんが過剰なまでに周囲に気を配る性格なのは。

「たぶん裏方の力仕事や掃除だと思うが、詳しくは美弥子に聞け」

「ミヤコ？」

「ここの女将だよ」

そう言って婆ちゃんは自動ドアをくぐり、旅館の中に入ってしまった。俺もボストンバッグを持ち直し後に続いた。

一週間前だった。その日、婆ちゃんから俺に電話がかかってきたのは。可愛い孫の声が聞きたかったから、なんてかわいい理由でわざわざ電話なんかしてこない人だから、何かあるとは思っただけど……。

「働いてる旅館を手伝いに来い、か」

自動ドアを抜けると、空調の効いた品のいいロビーがそこに広がっていた。入口脇には、派手ではない落ち着いた感じの綺麗な生け花が飾られているし、深紅色の絨毯に、値が張りそうな革のソファーやヴィンテージ感バリバリの柱時計といった高そうな物も置いてある。ロビーだけみれば、修学旅行で泊まった大旅館より高級そう
だ。

「ちょっとここで待ってる。美弥子を呼んでくる」

そう言って婆ちゃんはロビーから客室があると思う方へと行ってしまった。その途中で、宿泊客に深々と頭を下げて挨拶していたのは、俺からするとなんとも衝撃的な光景だったりした。そりやこ
で働いてるんだから、当たり前な行動なんだろうけどさ。

「……なんか、落ち着かないな」

ソファーに座ろうと思ったけど、客じゃない俺が占有しちゃうのもなんだし……ってことで却下。荷物を足元に置いて立って待つことにした。

改めてロビーを見渡してみると、大盛況！……って程じゃないけど、そこそこの宿泊客がいた。温泉目当てっぽい、というか温泉があるのかは知らないけど、そんなお爺ちゃんお婆ちゃん集団や、危険な薰りがプンプンする、ダンディーな紳士と色っぽいお姉さんの二人組。それに家族連れなんかも目に入る。そんないろんな宿泊客でロビーは賑わっている。

人をジロジロ見渡してるのも悪いと思って、大きな窓から見える、

たぶんこの旅館の庭園をばーっと見てた時だった。

「あの……お客様。チェックインは御済みでしょうか？」

「あー違います。えっとその……」

声に振り向いたその目の前の光景に、思わず言葉が詰まった。

女の仲居さんがそこにいた。金貨を延ばしてつくられたのかと思っ
てしまふくらい輝く黄金の髪に、南国リゾートの海を閉じ込めた
ようなエメラルドの瞳をした仲居さんが、だ。

「お済みでないようでしたら、あちらのフロントでお手続きお願い
します」

ミルクを塗りこんだと思わせるほど白く細い手を、仲居さんはフ
ロントに向けている。というか、めっちゃめっちゃネイティブな日本語
を話してるなおい。

「いや、ええと客じゃなくて……」

異邦人チックな中居さんは、よく分からないといった感じで首を
捻った。ああもう、そういう仕草がいちいち可愛いな。

「えっと、それではここにはどういったご用件で？」

「あれです。あの、ゴールドン・ウィーク中だけ短期アルバイトを
する予定の」

「……ああ！ 坂上お婆ちゃんのお孫さんっていう人ですか！？」

「そうです。そうです。坂上康介です」

とりあえずわかってくれたみたいで、いぶかしんでいた表情が、
ぱっと明るくなってくれた。

「それならこれから一週間よろしくお願いしますですね。私は……」
言葉と同時に、彼女はすっと手を差し出してきた。よろしくの握
手……をすればいいんだろうか。やばい、ただの握手だけなのに
軽く興奮してきた。

「よ、よろしく……」

白磁みたいな彼女の手を握ろうとした。
そのときだった。

「えーーーーーのーーーー!!」

Y
E
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!
!

「俺にいいいいいいいい！？」

ドロップキックミサイルは俺をロック

飛んできた勢いそのままにふっとんだ俺は、なんか微妙な臭いにする絨毯に顔を突っ伏した。

ふらつく頭をごろりと反転してみれば、スーツをビシッと着こなした、メガネ英国紳士が俺をにらんでいた。金髪碧眼の女の子はまだ事態が把握できてないからか、ぽーっと俺の顔を見ている。

とりあえずローストビーフは免れたっぽいけど、なんだこの状況は。

「絵乃に汚い手で触れようとしたヘンターイだろ？　よしよし、怖くて泣きたいなら僕の胸で……」

ざわざわとロビーが騒がしくなってきた。いくらなんでも当然だろうけど。

「その子はあたしの孫だよ」

婆ちゃんの隣には、すらりとした着物姿の女の人がいた。婆ちゃん

んとは違つて渋い紫色の着物で、誰もが抱く大和撫子のイメージそのものといった感じの人だ。

「……ハンクさん。後でお話がありますから」

囁くように。でも不思議と耳に届いた落ち着いた声は、英国紳士の顔面から一瞬で血の気を抜いた。

「お騒がせして申し訳ありませんでした。どうぞお部屋に案内致しますので、こちらへどうぞ」

婆ちゃんがはきはきした声で集まっていた宿泊客を散らばしていく。その間に大和撫子さんは、ゆっくりさた足取りで俺のそばまできて手を差し出してくれた。

「ごめんなさいね。うちの主人つて度が過ぎた親バカなのよ」

立ち上がった俺の服の埃をはたきながら大和撫子さんは言った。艶やかな黒髪がなんとも色っぽい。

「私が当旅館の女将、八千草美弥子です。あそこのイギリス人が私の主人で、ここの総支配人の八千草ハンク。そして、」

つとと流し目で金髪の女の子を見て、言った。

「あの子が私たちの娘の、八千草絵乃です」 引きつった笑顔で女の子、絵乃つて子はこちらを見ている。ハンクっていう顔面蒼白英国人は今にもぶっ倒れそうだ。

ここが、俺が働く旅館らしい。

第01話 旅館とドロップキック（後書き）

次回の更新は来週のうちにでもと考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8878f/>

俺のキモチをたべてくれ！

2010年12月24日14時43分発行